

# 1920年代アメリカのモダニズムと文化及び文学研究

—— Ann Douglas と Walter Benn Michaels をめぐって ——

田中敬子

モダニズムへの関心は、ポストモダニズムといわれる時代にあってますます高まっている。1976年に出版された Malcom Bradbury と James McFarlane 編集の *Modernism: A Guide to European Literature 1890-1930* (London: Penguin, 1976) は、モダニズム文学についての基本的文献の1つとなったが、このテキストは1991年に再版されている。この本が再版されたことは、1991年序文で編集者たちが述べているように、現在の “multi-cultural, introspective, self-conscious and relativistic age” (12) の先駆者としてのモダニストたちへの関心の高さの証拠ともいえよう。もちろんそれ以前からモダニズムについての議論は多くあったが、このテキストの出版後20年たった現在では、特に文化、民族性、国家というアイデンティティ問い直しの観点からのモダニズム研究が増えている。ここで取り上げるのは Ann Douglas 著、*A Terrible Honesty: Mongrel Manhattan in the 1920s* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1995) と Walter Benn Michaels 著、*Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism* (Durham, Duke UP, 1995) であり、いずれも1920年代のアメリカのモダニズム文化をあつまっている。モダニズム自体、定義が多様で矛盾することが多いが、ブラッドベリとマクファレンの本は、1890 - 1930年という広範囲の時代を設定し、アメリカを含んだ汎ヨーロッパ的活動としてモダニズムをとらえている。“A Guide” という性格上、この本が広範囲をカバーするのは当然だが、ブラッドベリらの国際性、文学中心にまとめられたモダニズムに対し、ダグラスとマイケルズの著作は、アメリカという国とその文化を意識したモダニズムに焦点が絞られている。現在特にアメリカでは、権力としての文化に敏感な文化研究が盛んであるが、ダグラスとマイケルズはことさら自分たちの基本的態度を表明してはいないものの、文化を研究対象に据える以上、ポストモダンの時代の文化研究のあり方を当然意識しているはずである。

アメリカで現在、文化というマクロのレベルでの理論研究が盛んな実状を、Hillis Miller は *Illustration* (Cambridge: Harvard UP, 1992) で多文化主義の立場から擁護する。彼は文化研究の主要目的の一つを、支配的文化をその特権的な立場から引きずりおろし、少数派文化を主張し復権することである、と明言している。その際に文化批評家は、少数派文化を支配的文化に同化させようとしたり、その本来の土壌から引き離して絶滅させてしまうような愚を犯してはならない。批評家は国家よりも民族性を優先し、文化間の差異を保存しなければならない。しかし一方で、“essentialist thinking” に陥ってはならない。<sup>1</sup> このようなミラーの提言は、人種問題が一つの中心となるダグラスとマイケルズの研究にとって、無視できないものである。しかし文化的差異を保存しつつ生産的に変容させる (“preserve and productively transform cultural differences” [54]) ことが大切だ、というミラーの主張は具体的にどう実現させるか、難しい

問題をはらんでいる。以下、ダグラスとマイケルズがそれぞれ、多文化主義に対しどのように考えているか、ということを検討に入れながら、二人のモダニズム研究を検討し、文化批評のあり方、及び文化批評と文学批評の関係について考えてみたい。

彼らの2冊の本は、いずれも1995年に出版され、ともにモダニズムと1920年代社会の関係を考察しているが、その際にアメリカ社会における黒人の問題がキーポイントだと考えている点で共通している。しかし彼らの結論は非常に対立したものとなった。<sup>3</sup> ダグラスが当時のハーレム・ルネッサンスに一定の評価を与え、ニューヨークの白人と黒人の交流の中にそれまでのヴィクトリア朝的文化の打破のエネルギーをみて、雑種としてのアメリカ文化を積極的に評価しているのに対し、マイケルズは、白人と黒人の混血の“‘new’ race” (60) の概念が期待された成果を上げず、当時の移民排斥主義に根ざす思考が白人モダニストの文学の言説の中にも深く浸透している、と主張する。

彼らの結論の際だった違いは興味深い。二人はともに、現在のアメリカ社会が抱える人種問題、多文化主義について解答を得るために1920年代社会を考察しているわけではない。しかし結果として彼らは、当時のアメリカ社会のなかに、現代アメリカが抱える問題の根を指摘することになっている。ダグラスがどちらかというと楽観的な見方をしているのに対し、マイケルズの方は、そうではない。

ダグラスは、1977年に出版した大著、*The Feminization of American Culture* (New York: Avon Books, 1978) の結論をスタートラインとして、フェミニズム、及び大衆文化論の立場をふまえ、文学から芝居、有名人のゴシップ、映画、ジャズ、政治まで多方面にわたって精力的に論じる。一方マイケルズは、1987年に *The Gold Standard and the Logic of Naturalism* (Berkeley: U of California P, 1987) を出版し、金本位制とアメリカ自然主義文学の関係について論じているが、彼の場合、今回の著作と前掲書との連続性は、ダグラスの場合ほど明確ではない。しかし文学内外のテキストを徹底的に読み込み、言葉からその時代の言説の特徴へと鋭角的に切り込んでゆく彼の手法は今回も健在である。以下まず二人の著書をそれぞれ紹介した上で、対照的な結論に達した二人の研究姿勢、方法を比較し、現在文化批評としてモダニズムを考えることの意味を論じる。

ダグラスは序章の冒頭において、自分が“Americanist”であることを、高らかに宣言する。アメリカは特殊である、そして1920年代は特にアメリカの特殊性をよく示している、と言う彼女はまた、その特殊性が積極的な価値を持つことを信じる楽観主義者でもある。本の副題が示すように、彼女はニューヨークにおける1920年代文化にアメリカ的なものが集約されていると考えており、ハーレム文化発祥の地であり、エリート文化と大衆文化が交錯していた場所の活気を賞賛する。

ダグラスの基本的考えは一言で言えば、モダニズムは母親殺しをたくらむ白人男性文化であり、モダニストは、「母親」が代表する19世紀のヴィクトリア朝的文化を否定するために、黒人文化

の台頭を歓迎し、自らの解放の梃子とした、ということである。前書で19世紀アメリカ文化が、経済的、政治的実権を握った男性に対してお上品なヴィクトリア朝的文化を標榜する女性たちに支配されていたことを明らかにしたダグラスは、1920年代アメリカが、それに真っ向から対立した、とみる。白人アメリカ人にとって、ヨーロッパ志向型文化との決別は、自国の黒人文化を発見することでもあった。白人文化と黒人文化の雑種としてのアメリカ文化を確立したことが、モダニズムの成果と考えられる。

第1章では、ベストセラーになった大衆小説『ポリアンナ』が代表する楽観主義や、第一次大戦以前のお上品な伝統に対し、1920年代の白人作家が露悪趣味を競ったこと、さらに、フロイトの影響から「原始的」な人間としてネイティヴ・アメリカンや黒人がもてはやされたことなどが述べられ、ニューヨークの白人社会が活写される。それに対して第2章は同時代のニューヨークの黒人の状況である。第一次大戦やフロイトの影響が、黒人にとっては白人の場合ほど深刻でなく、1920年代はむしろ黒人にとっては地位向上の希望があった時代、ととらえられる。白人たちは19世紀以来の minstrel・ショーのパターンを踏襲し、黒人の仮装をすることで新たな活力を身につけようとし、また白人が押しつける黒人のイメージを演じることに慣れている黒人は「黒人」を適当に演じるしたたかさをもっている。

第3章では、ニューヨークに腰を据えていたわけではないが、その文化に多大な影響を与えた人物として、Freud、William James、Gertrude Stein が紹介される。ダグラスは、大衆対エリート、洗練された偽善と原始的な率直な心、信念と理論、という1920年代文化の対立の構図のなかで、フロイトはエリート理論家の父権的立場を崩さなかったが、ジェームズやスタインはフロイト理論を受け入れながら、大衆文化にも理解を示していた、とする。第4章では心霊的なものを好んだ当時のアメリカ大衆文化とフロイトの精神分析の隠れた親近性が指摘され、遠隔地とのコミュニケーションを可能にする電話やラジオといったテクノロジーの進歩と心霊主義の流行の共通性にまで話が及ぶ。

第5章では、19世紀のヴィクトリア朝文化支配のアメリカでは不遇を困っていた Melville ら、男性作家たちのグロテスクとも見えた想像力が、急激に都市化した第一次大戦後社会で身近に感じられるようになったことが指摘される。続いて第6章で、母親殺しのテーマがアメリカのモダニズム文学、大衆小説、一般社会での女性のイメージをつうじて検証される。

第7章はこの時代の黒人と女性の関係が検討される。ダグラスに言わせれば、黒人と女性はこの時代には並び立つことがかなわなかった。女性参政権運動の中心であった中流階級白人女性たちが、白人女性をレイプする黒人、という神話を受け入れ、劣等人種としての黒人、という論理を自分たちの運動を有利に進めるために利用したことが指摘される。一方この時代の多くの白人男性作家にとって、母親殺しと、黒人と一体化する夢が、密接に結びついていたことが述べられる。母親殺しという象徴的な行為によって、1920年代アメリカは黒人文化に近づき、白人と黒人の雑種としてのアメリカをとらえることが可能になった。

第8章から10章までは、20年代の黒人文化の発展が語られる。新移民の流入に危機感を抱いた

白人たちの移民排斥主義に対し、黒人がそれを機に、新移民の流入以前からアメリカ人であった自分たちのアイデンティティに気づき、主張し始めたこと、黒人文化の伝統ばかりでなく、白人文化の伝統も自分たちのアメリカの文化として意識的に利用するようになったことが指摘される。そしてジャズ、ブルースを中心に、黒人と白人の雑種としてのアメリカ文化が例証される。

最後の第11章でダグラスは、モダニズムの陰で抑圧された母性的なものが回帰してくる可能性を、高層建築のなかに示唆する。ついでエピローグでは、30年代にはいると作家たちが母なる神を求めるようになったこと、ハーレム・ルネッサンスが効力を失い、ハイ・ブラウな文化と大衆文化の区別が再び強調されるようになったこと、など20年代文化の終わりが告げられる。

ダグラスの本の魅力は、多方面にわたる膨大な資料によって20年代のニューヨーク社会の活気を伝え、黒人と白人の交流を読者に印象づけるところであろう。特にジャズについては、黒人と白人との協力の成功が納得させられる。しかし、20年代文化の活力がなぜ続かなかったのか、その点になると明確な説明はなく、1929年の大恐慌のせいだけで片づけるわけにはいかない。黒人と白人の雑種文化は本当に確立されたといえるのだろうか。モダニズムが母性的なものを排除し、バランスを欠いたことに凋落の原因がある、とそれとなく示唆されている点もあるが、その母性的なものの定義は明確でない。しかし詳細な議論にはいる前に、マイケルズの研究について先に紹介しておこう。

マイケルズの本は、ダグラスの本が606ページもあるのに対して、186ページとコンパクトである。内容は小見出しがついて13にわかれているものの、章形式にもなっていない。ダグラスが、1920年代社会をできる限り多面的にとらえようとするのに対し、彼の方は当時の移民排斥主義とモダニズム文学の関係に焦点を絞っている。しかし彼は、混血文化の誕生をみるダグラスと違い、20年代社会に現代にいたる多文化主義の根を認め、モダニズムの中に混血文化の否定をみる。

マイケルズは、集団のアイデンティティが1920年代アメリカ文化の中心的問題となった、と考える。彼はそもそもモダニズムの特徴のひとつを、アイデンティティへのこだわりにあると考えるが、その文学表現の中に当時の社会の考えも反映されている、とする。20年代の移民排斥主義をよく表しているテキストの例として彼は、William Faulkner の『響きと怒り』、Ernest Hemingway の『日はまた昇る』、F. Scott Fitzgerald の『偉大なギャツビー』、Willa Cather の『教授の家』などをあげる。これらの作品に共通するのは、一族の強化発展と純粋性保持の願望が矛盾し、一族滅亡の予感が感じられることである。純粋性保持のためには他人の血の混じる結婚よりも近親相姦や不能、ホモセクシュアリティが選ばれる。しかしその結果は一族の滅びであり、『教授の家』にあるように、滅びゆくネイティヴ・アメリカンに対する親近感が生まれる。

ダグラスの場合、フロイトの原始的人間への回帰の強調によって、黒人とネイティヴ・アメリカンは同じ原始人として白人からもてはやされたことになる。しかしマイケルズは、ネイティヴ・アメリカンが、滅びゆく純粋な文化を代表するアメリカ人の先祖として思慕されるのに対し、黒人は原始的だと思われた故に、社会的ダーウィニズムに沿って、生殖能力の高い、白人を滅びに

追いやる種族として恐れられたことを強調する。<sup>3</sup> このことはネイティブ・アメリカンに市民権を与える法律の制定と絡めて論じられる。

マイケルズはついでこの時期の代表的人種論者である Lothrop Stoddard や Thomas Dixon を論じて、20年代の人種主義の微妙な変化を説明する。それまでの進歩主義が、新移民も努力してアメリカ市民権を得ることによってアメリカ人になると考えるのに対し、20年代の移民排斥主義は、市民権を得るだけではアメリカ人ではない、アメリカのアイデンティティは、文化の、それも白人文化の継承にある、と考える。新移民が同化するのはむずかしく、ましてや黒人が白人文化に同化するのは不可能となる。ディクソンは、進歩主義的側面を持つ普遍的白人至高主義者である。彼の小説にあっては、ユダヤ人はアメリカに同化する可能性があるが、黒人たちにはその可能性はありえない。マイケルズは Charles Chestnut や、Jean Toomer ら、混血児を人種問題を乗り越える鍵と期待して扱った作品を検証し、混血児は結局黒人に収斂されてしまう事実を指摘する。黒人の白人文化への同化はあり得ない。さらにストッダードになると、白人至高主義から、多文化主義へと変化する。すなわち、普遍的に白人が最高であるかどうかは関わりなく、単に白人であるから、という理由によって白人文化を標榜する、という態度である。

次にマイケルズは William Carlos Williams をとりあげ、彼のモダニスト詩人としての言語観が、多文化主義に移行する移民排斥主義に通じると説く。言葉の自立性に最高の価値をおき、経験を切り離して言葉が言葉そのものである故に詩である、と主張するウィリアムズの論理のトートロジーは、白人である故に白人文化に属するという移民排斥主義、そして多文化主義と同じ言説だ、とマイケルズは論じる。<sup>4</sup>

一方、Zora Neale Hurston や、Langston Hughes ら黒人作家のモダニズムも、“New Negro” というアイデンティティ模索と直結している。ウィリアムズの詩学が、言語による言語表象行為批判になっているのに対し、黒人作家は、黒人が自らを言語によって表現するという表象行為に、ことさら自覚的にならざるをえない。白人として通用する混血児も、黒人としてのアイデンティティの表現を求める。Melville J. Herskovits のように、ハーレム・ルネッサンスの中で、アメリカ黒人は完全にアメリカに同化している、という論戦を張り、アイデンティティの根拠を人種より文化に求める場合でも、彼の言う文化は人種を根拠に成立している、とマイケルズはいう。

マイケルズはさらに、Henry James や Edith Wharton らモダニズム以前の作家たちは、アメリカのアイデンティティ形成における人種の役割に十分敏感でなかったこと、また同じ20年代でも、普遍主義を信じる T. S. Eliot や Ezra Pound、E. M. Forster といったインターナショナルモダニズム派と、アメリカのモダニストたちの違いを指摘して、移民排斥主義、多文化主義の特徴をより明らかにする。そして文化は意識して維持に努めなければ、特定の種族同様絶滅の恐れがある、という1920年来の文化の概念が多文化主義の基底をなし、その多文化主義は人種差別批判にならず、むしろ人種主義の一種である、と結論する。

ダグラスもマイケルズも、19世紀から20世紀にかけて変化した「文化」概念に沿ってモダニズ

ムを論じる点では共通している。19世紀においては文化は教養、洗練と同義語であり、しかも支配階級に是認された文化のみが文化であって、その文化圏に属さない者にとっては、それは修練して身につけるべき目標であった。しかし20世紀になると、文化とは様々であって、優劣をつけられるものではない、「野蛮」といわれる場所の文化も独自のシステムとして、文明国といわれる国の文化となんら遜色はない、ということが徐々に認められるようになった。19世紀に支配的であったヴィクトリア朝文化は、マルクス主義、ダーウィニズム、及びフロイトによってお上品な気取りを容赦なく破壊され、特権的な地位を失う。ダグラスは基本的にモダニズムを、それまでのヴィクトリア朝的文化支配からの脱却、ととらえる立場に属する。<sup>5</sup> マイケルズは流れとしては、Alan Trachtenberg がとらえた19世紀後半アメリカ社会、すなわちアメリカという国のアイデンティティがまだ階級理念で議論されていたいわゆる「金ぴか時代」時代に、人種、民族文化問題の萌芽があるとみて、WASP 文化を掲げる普遍的進歩主義から移民排斥主義への移行のうちにモダニズムをとらえる。<sup>6</sup>

ダグラスは、イギリスに対して後進国であったアメリカ、白人文化に対して抑圧されてきた黒人文化の解放を強調し、性に関しては、ヴィクトリア朝文化を支配していた女性に対して男性文化の復権をモダニズムの特徴とする。文化が政治権力を持つということをモダニズムは明確に認識していた、ということを彼女は国家、人種、性という分野で検証しているわけだが、ある意味でダグラス自身、アメリカ文化の特殊性を唱えることで文化の政治的な影響力を行使しようとしている、といえよう。多文化主義が主流である現在のアメリカにあって、雑種文化としてのモダニズムを評価することは、意識的に黒人文化と白人文化を同一化してアメリカ文化の同種性、一元性を主張することになる。白人作家がいかに自分たちの作品のなかで黒人のイメージを搾取してきたか、またアメリカ文学研究がいかに黒人の存在を無視してアメリカ的なものをうたいあげてきたかが検討されつつある中で、ダグラスの主張は挑戦的、かつ楽観的である。

黒人作家は、黒人文化が白人文化より劣っている、という主張に反論せねばならず、また白人に認められると、黒人は白人のまねばかりする、という批判に反論しなければならなかった。ダグラスはこの黒人芸術家の抱える二重の問題を認めた上で、1920年代の黒人と白人の協力が一般に誠実、有効なものであったと考える。しかし黒人作家と白人作家の友情や、またブルースが白人のメディアを利用して広まったことなど、彼女の挙げるべく大な具体例は、雑種文化を証明するのに十分説得的とはいえない。ただし彼女の雑種文化論の根幹をなすロールプレイ論、すなわち白人、黒人ともにロールプレイを習性としていてそれがアメリカ文化の特徴である、という指摘は、マイケルズとの関連でも重要であるので、もう少し詳しく検討してみよう。

マイケルズは、文化はその言語表現の中に端的に現れる、という立場をとるが、ダグラスとマイケルズの間で雑種文化をめぐる評価が分かれた理由の一つは、彼らが対象としたジャンルの多少にもよるかもしれない。ダグラスがロールプレイ論で引き合いに出す minstrel・ショーはもともと白人が黒人のふりをして顔を黒く塗って出演していた。黒人はそれを模倣して、本物の黒人の minstrel・ショーという形で後を追う。白人がステレオタイプの黒人をまねること、

さらに白人が演じたステレオタイプ化された黒人のまねを黒人がすることが現実の目の前のステージで行われるとき、それがロールプレイであることは観客の意識のどこかに必ずある。またダグラスが詳述する黒人、白人のコメディアンや歌手たちも、舞台上に立って演じている限り、彼らの実体と彼らが演じ表現する役割との間に距離が存在することが感じられ、その微妙な距離の故に、より魅力を増し観客を惹きつける。演技者と、自らの思いこみや欲望が俳優の演技に投影されるのを見る観客は、一種の共犯となって洗練された虚構のドラマを作り上げる。豹をつれ、野生味をアピールする Josephine Baker に熱狂する白人観客も、それが作り上げられた幻のイメージであることはどこかで承知している。もちろん、黒人が無知だが従順な、もしくは原始的で野蛮な「黒んぼ」の役割のみに限定され、その虚構性が明らかにされない場合も多い。それでもダグラスのロールプレイ論は、合わせ鏡のような虚構性の強い、エンターテインメントの分野ではかなり有効である。

しかし表現媒体が書き言葉でしかない文学の場合、ロールプレイの意識は舞台芸術ほど明らかではない。Paul Dunbar の詩が、黒人氣質は伝えるが黒人の魂を伝えていない、と批判されたように（マイケルズ 90）、意識的なロールプレイを言語で表現できるかどうかが問われる。ダグラスは黒人作家がステレオタイプ化された黒人を表現することを避け、強いられたロールプレイを拒否したことを認める。しかし彼女は、黒人作家が白人文化も意識的に継承することでアメリカ人としての自己を主張した、と結論する。白人文化の利用は黒人にとって模倣ではなく、ロールプレイというアメリカ文化の伝統の一つだ、ということになる。白人側も当然ロールプレイをし、ダグラスはヘミングウェイや Hart Crane が自分の母の束縛からの解放に黒人イメージを利用した例をあげる。しかし黒人作家たちが直面したロールプレイの問題は、白人文化からアメリカ文化へ移すだけで解決するだろうか。1920年代の黒人たちはアメリカ人への「格上げ」を望んだのか？ ハーレム・ルネッサンスで強調されたのは“New Negro”であり、たとえ彼らが白人と同じようにふるまったとしても、人種意識は非常に鮮明である。文学における人種的ロールプレイの複雑さは、Michael North が *The Dialect of Modernism: Race, Language, and Twentieth-Century Literature* (New York: Oxford UP, 1994) でつとに明らかにしたところである。白人作家は黒人のイメージの中に自らの願望を託し、かつ黒人イメージと一体化することへの恐怖と反発をにじませる。黒人作家はステレオタイプ化された黒人を乗り越える表現の模索という難問に取り組まねばならない。ダグラスの論は同じロールプレイでもこのような白人黒人の意識の違いをよく強調せず、同一化してしまう。彼女は D. H. Lawrence がうわべの体裁をはいで恐ろしい現実をみたり、“New Negro” が白人と変わらぬ様子に失望するのをたしなめて、黒人の装う仮面の複雑さを洗練された感性だ、と擁護する。多文化主義にあってはたいいてい批判的に取り上げられる minstrel・ショーを逆手にとってアナロジーとして用い、仮面を付けることが、アメリカ文化の本質である、とロレンスに切り返す論法は見事である。しかしそこでは人種問題に関わる差異の議論が十分に尽くされないままに、アメリカらしさという国レベルの文化の問題にすりかわっている。

一方マイケルズは、黒人モダニストの直面した問題をロールプレイというよりも模倣ととらえ、彼らは模倣を黒人文化（アメリカ文化ではない）のもっとも洗練された技法に高めようとしたという。ダグラスはロールプレイを白人黒人共通の文化的身振りとしてアメリカ文化へ還元するが、マイケルズによれば黒人芸術家は模倣を黒人文化へ還元する。マイケルズは白人作家が利用した黒人のイメージにはほとんどふれず、むしろ言語を他のなにものとも関係づけることを拒否した白人モダニストに注目し、黒人作家と白人作家の態度のずれを説く。マイケルズが白人作家の黒人イメージ利用を捨象するのは意図的であろう。彼が移民排斥主義との共通点をみるモダニスト言語観を発表したウィリアムズも、自分を黒人音楽家と想像して詩作した時期がある。マイケルズは1920年代の白人文化と黒人文化の矛盾をはらんだ共通点を主張するよりも相違点を検討する。それは国よりも民族性を優先させる多文化主義に通じる手法であるが、マイケルズは多文化主義を通して多文化主義が陥るエッセンシャルイズム批判に到達した、ということになる。

ただしマイケルズの論——白人モダニストは言葉と指示物の恣意的な関連を断ち切って言葉の自律性を強調したが、それが移民排斥主義につながるという——は強引にすぎる点がある。言語に言語以外の権威を認めない、言葉が指し示す物への帰属意識を拒否する、というのは民族性、父祖といった始源を拒否することではないだろうか。指示物との関係を断ち切って言語そのものを推奨するならば、黒人白人の区別なく、アメリカ市民権について言語で記述された条件を満たすものはアメリカ人と認める、という進歩主義的な論理も可能のはずである。もちろんマイケルズは、移民排斥主義だけでなく国際派の普遍主義的モダニストの存在も認めているので、モダニストすなわち移民排斥主義者といっているのではないが。なるほどモダニストのつむぎ出す言葉が権威になる、という観点からすれば、それはそれで父権的であり、言葉が言葉であるから、というので価値がある、というのはエッセンシャルイズムに陥る危険性があるのは確かである。マイケルズの指摘は、モダニズムの言語観が移民排斥主義にもつながりうる、ということを考えさせる点で大変刺激的である。ただアメリカのモダニストの言語に対する信頼は不信と隣り合わせであり、両義的である。マイケルズは『響きと怒り』で、言葉の上の近親相姦を夢想する主人公 Quentin の言語観がモダニスト的、移民排斥主義的だ、と指摘する。しかし自らの言語の中に閉じこもるクエンティンは、彼の言語空間が自己適応的、自己増殖的な言葉遊びの中で瓦解してゆくのをみる。『日はまた昇る』で主人公 Jake Barnes は、同族意識をもてる自分たちの仲間と Robert Cohn の境界を厳しく定め、ユダヤ人のコーンを軽蔑する。しかしブルゲットの村でセンチメンタルな小説を読んで満足するジェイクは、その閉鎖的言語宇宙好みを皮肉られてはいないだろうか。フィッツジェラルドの *Gatsby* は敗北するが、彼を死に迫いやった Buchanan 夫妻のエゴイズムと墮落は明らかである。白人モダニストが移民排斥主義的傾向を持っていたとしても、彼らは自らの言語至上主義の不毛性を批判する能力も持ち合わせている。個々の作品を丁寧にみてゆくと、マイケルズのいう移民排斥主義的傾向は、それに拮抗する勢力によって批判され、少なくとも均衡を保たれていることが多い。

ヒリス・ミラーがいうように、文化研究ではその時代の大きな流れをつかむことが大事で、文



化批評家は作品の細部まで論じることなく、個々の作品を時代の病を診断するための症候ととらえる。<sup>7</sup> 特定のモダニズム小説やモダニストの言語観に移民排斥主義の兆候を読みとることも、その意味では価値がある。しかし自らはおそらく無意識のうちに移民排斥主義に通底する言説を用いた個々の作家たちが、その作品内においてそれを否定、またはそれに対抗する力を配置していることも同様に重要である。文学作品が時代の反映以上の意味を持つのは、作家がその時代に一方ではからめ取られながらも他方ではその外にでる視点や少なくともその可能性を示すからである。Toni Morrison は、文学研究は政治的でないことを最善としてきたが、そのために失ったものは大きい、という。<sup>8</sup> 確かに人種に敏感になることによってマイケルズはモダニズム文学解釈に新たな一石を投じた。しかしそれをエッセンシャルイズム批判や黒人文化、白人文化の差異の指摘以上の意義あるものにするには、文化批評のマクロの視野に対して個々の作家、作品批評のミクロの視野からのフィードバックが必要であろう。文学研究が作品、作家研究だけでよい、というのではない。言語表象作用を扱う限りにおいて文学研究は文化批評の一翼を担う。文学研究は一方で言語文化の包囲網を見据え、その中で作家にどのような創造行為が可能なのか、その作品が社会とどのような関係にあるのか、を見極める作業である。文化の中での同一化と差異化の絶え間ない戦いにさらされている点、また批評する過程で研究者自らの立場を検証せざるを得ない点で、文学批評は文化批評と同様である。

文化批評が文学の個人性、私性に関わる例として、マイケルズが指摘する1920年代文学の近親相姦、ホモセクシュアリティ、不能への関心をあげることができよう。これはダグラスの1920年代文化の「母親殺し」のテーマとも関連する。マイケルズは少なくとも1920年代アメリカ文学の上記のテーマは、移民排斥主義を考慮して検討すべきだ、という。確かにフォークナーなどはこれらのテーマにとり憑かれていたのではないと思われるし、ヘミングウェイ、フィッツジェラルドもよくとりあげている。もっとも1920年代に限らずアメリカ文学自体、これらのテーマになじみやすい傾向はあった。Poe、メルヴィルらの近親相姦のテーマ、Whitman のホモセクシュアリティなど、アメリカ文学は性の倒錯をけっこう示している。もはや古典というべき Leslie Fiedler の *Love and Death in the American Novel* (New York: Scarborough, 1987) や、最近の Sundquist の研究は、<sup>9</sup> 近親相姦やホモセクシュアリティ、不能のテーマと黒人問題のつながりを指摘しているが、移民排斥主義と特定してこれらのテーマを論じたのはマイケルズが初めてであろう。最も私的な性に関わるテーマをマイケルズは政治的な観点から論じたことになる。

ダグラスの強調する「母親殺し」のテーマは、上記のテーマに共通する生殖の否定という事実を積極的に言い換えたものか、という想像が働く。しかし最初に少しふれたように、ダグラスの母親の定義には曖昧なところがある。ダグラスは、モダニストの攻撃目標は白人中流階級女性が掲げたお上品なヴィクトリア朝的文化であり、それはいいかえれば、ヴィクトリア朝のモラルを説く母親だ、という。その意味で確かに母親殺しは行われたのであるが、一方心霊主義という1920年代の大衆文化にもダグラスは母性的なものを認めている。ハイ・ブラウな文化とロウ・ブラウな文化が接近したのが20年代の特徴であるなら、大衆文化として母性的なものは生きている

ことになる。ダグラスの言う母親殺しは、行いすました母の否定だけを意味している、ととってよいのだろうか。ダグラスは母親の即物的、性的な側面をあまり強調しない。モダニズムが原始的なものを求めて黒人文化を発見したならば、そこにオイディプス以前の母性的領域も発見した可能性がある。しかしダグラスは、無意識や、父権に劣るおぞましい母性、というフロイトの概念よりも、潜在意識や、庇護を与えてくれる母性、という W. ジェームズの概念を積極的に評価しようとする。そうするとモダニズムの時代にも母性は大衆文化、楽天主義思考に形を変えて生き残る。それは Sandra M. Gilbert、Susan Gubar 著の *No Man's Land* (New Haven : Yale UP, 1988) にもある程度支持される見方であり、<sup>10</sup> 20年代には不人気であった W. James の再評価とともに興味深い。しかしそうすると、ダグラスのいう母親殺しはますます、密かに権力を志向する、形骸化したヴィクトリア朝的母亲像の否定でしかなくなる。またダグラスのいうとおり、1920年代作家たちは大衆芸術への興味を表明したが、モダニズムが強烈なインテレクチュアリズムを発揮して大衆離れを引き起こしたのも事実である。ダグラスのいう母親は1920年代に殺されたのか、生きていたのか、判断に苦しむ。マイケル・ノースはモダニズムは正当派英語に反発して方言を選択した、としているが、正当派英語がヴィクトリア朝のイギリス英語であるなら、アメリカのモダニストは父の言語に反乱を起こした息子たち、と解釈することもできよう。モダニストが攻撃したヴィクトリア朝女性文化の背後に強固な父権社会があることを考えれば、モダニズムは母親殺しだけとは言い切れないのである。

ダグラスは子を産む性、というエッセンシャル主义的な母親像を避けて、社会的に認められ、機能する母性の役割で母親を論じようとする。彼女は人種問題にせよ、性の問題にせよ、エッセンシャルリズムを警戒して避けようとするが、その結果アメリカ文化の性急な同一化やアイデンティティの曖昧さがおこっている。文化というものが、自然のあるがままの姿から逸脱しようとするところに生まれるとすれば、エッセンシャルリズムを避けるのはもっともであるが、一つの文化や集団の同定化はそれだけに慎重でなければならない。

それにしてもダグラスの母親の定義が一方で適切でありながら、他方で反論材料が多々あるところに1920年代のおもしろさがある。現代がモダニズムに惹かれる一つの理由は、アイデンティティを追求していくとアイデンティティはむしろ混乱の度合いを深め、やはりアイデンティティにこだわった1920年代社会がその混乱をよく示しているからかもしれない。性差の混乱は近親相姦やホモセクシュアリティ、不能の問題と同じくらい、この時代の文学に顕著である。近親相姦等の問題がマイケルズのいうように一族の純粋性保持願望、すなわち一種のアイデンティティの囲い込みであるとするれば、性差の混乱はアイデンティティを規定されることへの反発といえる。マイケルズによる1920年代文学の近親相姦等のテーマの人種問題化は強力である。文学研究がその解釈を無視することなく再び個々の作品を個別化して考えるためには、性差の混乱のテーマによる反論のように、同じ文化批評のマクロのレベルからの議論を経ることも必要となる。文学研究者はマクロとミクロの両刀使いであることが求められる。

ダグラスはエッセンシャルリズムを避け、多文化主義を拒否してアメリカ文化の定義を意図する。

マイケルズは多文化主義の手法をとりながら多文化主義の陥るエッセンシャルリズムを否定する。それぞれ長所短所はあるにせよ、各々のモダニズム研究によって彼らは、現在問われているアイデンティティの考え方についての自らの立場を明らかにしたことになる。集団のアイデンティティをどうとらえるか、多文化主義とエッセンシャルリズムの関係、個人主義や普遍性、さらには芸術の政治化について、批評家、研究者は常に自問させられているが、モダニズムはそれらを検討するための格好の材料を提供してくれる。Paul de Man がいうように、“modernity” は20世紀前半のモダニズムの芸術家たちの創作の専売特許ではなく、現在、批評の中で“modernity”の可能性が探られているといえよう。<sup>11</sup>

## 注

- 1 Miller, 45-48. “essentialism” は、人種、民族、性などによってそれぞれ感性や理解できる事柄が定まっていて、それはほかの人種や性には共有できない、という考え方であるが、ここではそのまま「エッセンシャルリズム」と訳しておく。
- 2 時期的には、アン・ダグラスの著書の方が少し先に出版されたようであるが、マイケルズが文末注で断っているとおり (144)、彼の著書はそこで彼がダグラスの本について具体的にコメントする余裕のないままに続いて出版された。
- 3 フレデリクソンは、社会的ダーウィニズムを援用した黒人差別について詳しく論じている。George M. Frederickson, *The Black Image in the White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914* (Hanover: Wesleyan UP, 1971).
- 4 マイケルズは序文で Hugh Kenner に敬意を払っているが、アメリカのモダニスト作家の特質を、言語による新たな世界をめざしたこと、とらえたケナーも、その言語観が移民排斥主義に結びつけられるとは思ってもよらなかったであろう。Hugh Kenner, *A Homemade World: The American Modernist Writers* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1975).
- 5 シンガルは、南部社会に限ってではあるが、ヴィクトリア朝文化からモダニズムへの変化に伴うきしみをよく観察し、ダーウィニズムやフロイトの影響をよく押さえている。Daniel Joseph Singal, *The War Within: From Victorian to Modernist Thought in the South, 1919-1945* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1982).
- 6 Alan Trachtenberg, *The Incorporation of America: Culture & Society in the Gilded Age* (New York: Hill and Wang, 1982). 特に3章、5章参照のこと。
- 7 Miller, 17.
- 8 Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and Literary Imagination* (Cambridge: Harvard UP, 1992), 12.
- 9 Eric J. Sundquist, *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature* (Cambridge: Harvard UP, 1993). また *Faulkner: The House Divided* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1983) も参照のこと。
- 10 もっともギルバートらは、20世紀に入って女性作家は19世紀ヴィクトリア朝時代の女性作家ほど抑圧を受けずに、男性とより自由な戦いが出来るようになった、と考えるが。
- 11 Paul de Man, “Literary History and Literary Modernity,” *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism* (Minneapolis: U of Minnesota P, 1983), 143-144.